

# ものづくりミュージアム

八代研究室  
00512026 今井 秀紀

## 1. はじめに

私は、現場作業の体験や建物を実習広場に実際に造るなど、他では体験できないことを学べるところが本学の良さだと思う。学生以外の方にも、ものづくりの素晴らしさやものづくり大学の面白さを伝える場あったら面白いと思い、ミュージアムの設計に至った。

## 2. 目的

学生が造ったもの、コンテストで賞を取ったものなど良い作品もたくさんある。そういったものの一般公開や、建設、製造学科で作った原寸模型の展示、ものづくり体験など通しものづくりとはどういうものかを理解し、学んでもらうことを目的とした施設をつくり、本学やものづくりの発展につなげていきたいと考えた。

## 3. 敷地(図1)

現在、東ゲートとされている「ものづくり大学入口」のバス停の前には大学は無く、産廃業者の敷地に挟まれた道を通る状態となっている。ものづくりから墓場までを表現する意味でも最適の場所と判断し、大学とバス停の間にあるスペースにミュージアムを提案する(図2)。

## 4. 計画内容

### ①規模、プラン説明

主に学生作品の展示をする西館、ミュージアムオリジナル作品を展示する東館の二つの空間に分けることで、ミュージアムにメリハリをつけ、来館者が分かりやすい展示環境を心がけた(図2)。

森の中に自動車を駐車。ものづくりで欠かすことができない木材本来の姿を見せる。環境問題を訴えるメッセージにもなる(図2)。

ミュージアム入口は西館の用水路側とし、道路側に背を向けることでクールさを演出する(図3)。

階段の幅は広く、踊り場も多数設けた。移動するだけのものではなく、見る位置によって変わる展示物の印象を発見し楽しむスペースとして使い、足の疲れを軽減させる狙いもある。

野外休憩スペースは円状。そこから見える建物や田んぼ、道路、新幹線など人の歩と共に生まれ、日々変わってゆく景色を180度見渡せるようにした。

### ②大学との関係

東館と西館の間に大学の東ゲートが伸び、学生の通る道を確保すると共にミュージアムの搬入口として利用する(図3)。ミュージアム2階で西館と東館をつなぐ接続通路の存在は、下を歩く学生や来館者に門を意識させ、くぐることをきっかけにミュージアムと大学へのつながりを表現する(図4)。

吹上駅から本学に来る学生は南ゲートを通るが、南ゲートの前の道は歩道が十分に確保されていない。毎日学生が行き来するには自動車との距離が近く少し危険。新幹線高架下にアイキャッチを目的としたブリッジを伸ばし、敷地内へと導いた。(図2、5)。

東館は一般の方がふだん立ち入ることが無い空間を用意。実際に足場を組み、家の建築現場を作る。反対側は家断面をむき出しにした形となっており、家の構造を目で見て理解すると共に断面図と比較し違いを楽しむことが出来るユニークな展示空間となる。広々とした空間を必要としたため、西館とは異なる構造体を取り入れた(図6)。

## 5. まとめ

船形の敷地だったことから、ミュージアム全体を船のような形にまとめた。

新幹線はものづくりの技術が生んだ結晶のひとつである。支える力を注ぎ込むイメージで、ものづくりという船の先端を新幹線高架に突き刺し、そこから生まれる無限大の可能性と力強さを表現した。

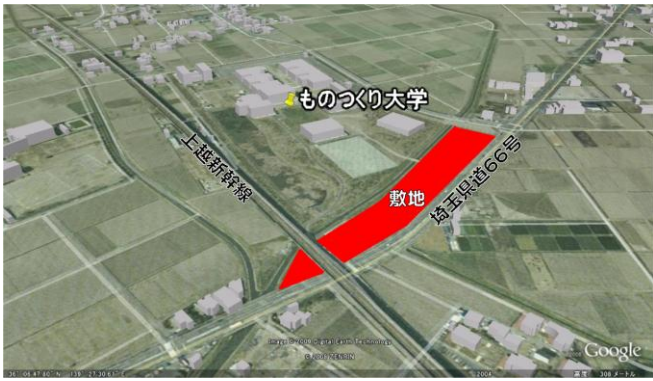


図1 敷地上空図

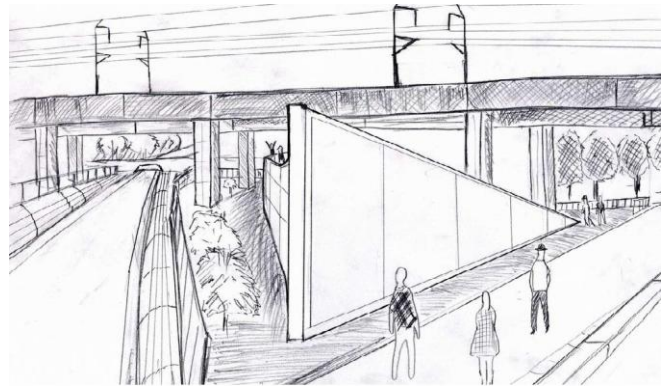


図5 ブリッジイメージ

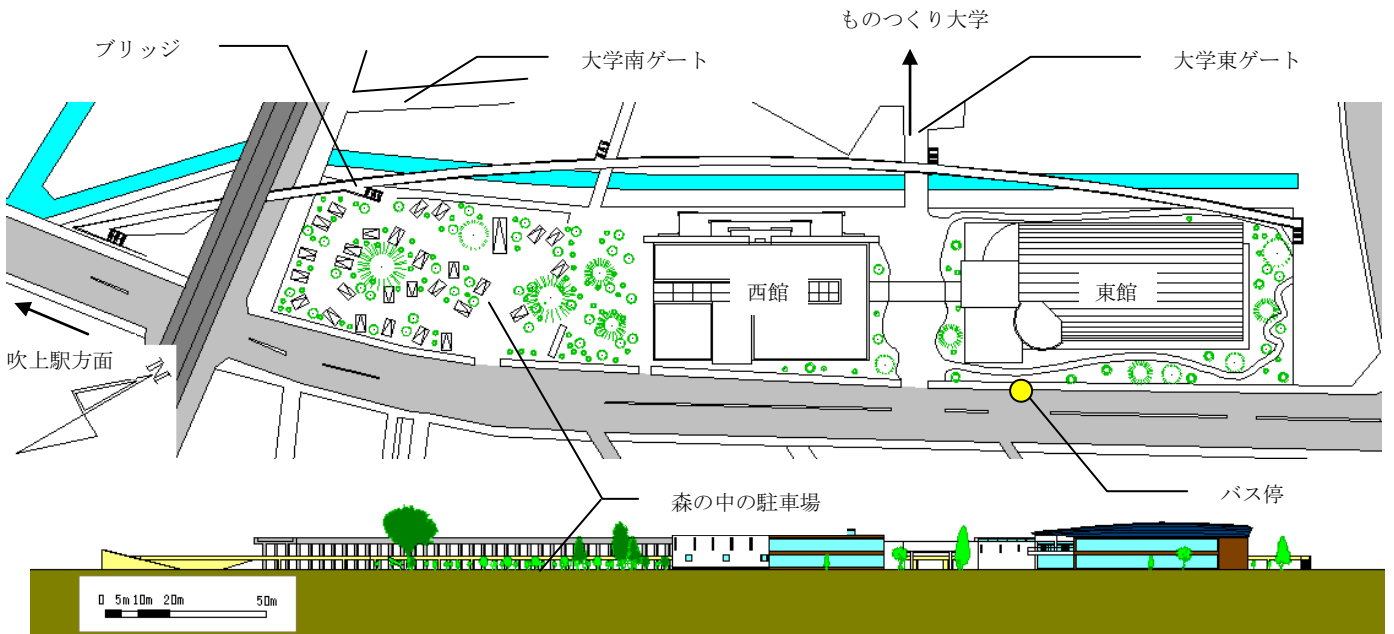


図2 敷地配置・立面図

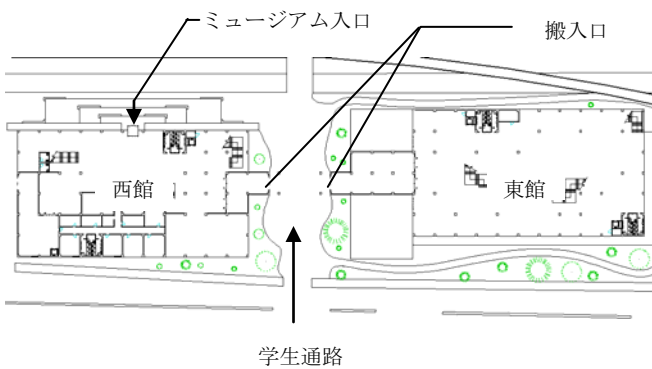


図3 1階平面図

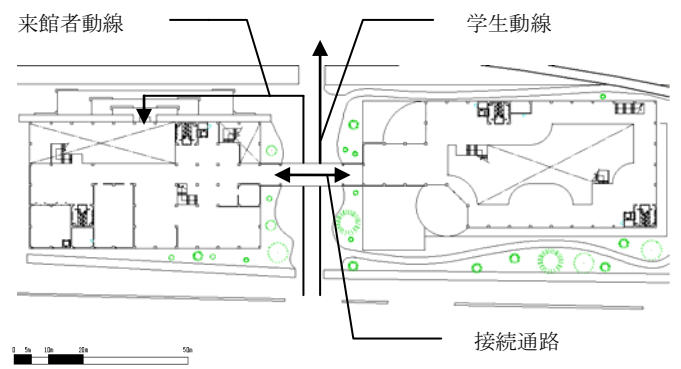


図4 2階平面図

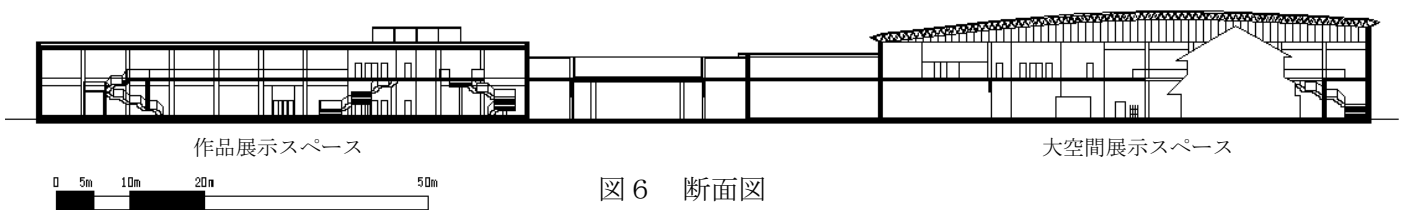


図6 断面図